逃走中 ~ 走れ！ カオスの世界 ~

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中 ～走れ！ カオスの世界～

【Nコード】

N7554W

【作者名】

葉月

【あらすじ】

これは、カオスの世界の物語である。カオスの世界で逃亡者はインターから逃げ切れるのか！？

はじめりという名の雑談(前書き)

こんにちはこんばんはおはようございます。『のび太戦記』、『君と生きる道 僕が背負う罪』などの作者の葉月です。今回は、バラエティー番組でおなじみの逃走中をやらせていただきました。詳細は本編でどうぞ。

ちなみにナレーションの声はマダオで再生してくださいw

はじまりという名の雑談

作者、葉月は逃亡者代表である木実、純、家康、零児を呼び寄せて会議を開いていた。その会議とは、バラエティー番組でおなじみの『逃走中』を彼らでやるということになったのだ。

葉月「という訳で、みんなには『逃走中』をやってもらおうよ」

家康「『逃走中』か……はんたあから逃げ回って賞金を稼ぐというものだろ？」

木実「それだけではないですよ。ミッションもこなさなきゃいけませんし」

純（石田）「ハンターに捕まったらあぼーんですけどねww」

木実「ミッションを失敗するとハンターが追加してくるから注意していかないよ！」

零児「俺達は逃げる側だからいいが、問題は追う側だな……」

家康「そうだな……相手がとても厄介な者だったら逃げ切れないだろうな」

木実「全力で走っても追いついちゃうというのも悲しいよ（´；；´）」

、（´；；´）」

純（石田）「特に、俊足の人に見つかりたくないよ……（´；；´）」

葉月「まあ、ハンターをやる人も結構集めたからね。ハンターの人にはスーツにサングラスという格好でやっていただくとw」

木実達の他にも逃亡者は、あるいはハンターは一体誰なのかは次回にて紹介する。

登場人物 く逃げる者く (前書き)

どうも、葉月です。今回は逃走中の「逃げる者」を紹介します。

登場人物 く逃げる者く

オ리지ナル

村田木実……中学三年生。明朗快活で男勝り。足は速い。ミッションも積極的に参加する。

石田 純……中学三年生。明朗快活でしっかり者。足はかなり速い。ミッションも積極的に参加する。

真田雪菜……中学一年生。明るくて無邪気。足は普通。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

土岐彰久……高校二年生。明朗快活でお人好し。足は速い。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

日下部麻穂……高校二年生。明朗快活で男勝り。足はやや速い。ミッションは参加する。

無双OROCHI

孫尚香……孫堅の娘。明朗快活で男勝り。足は速い。ミッションも積極的に参加する。

稲姫……本多忠勝の娘。凜とした態度を取る。足は普通。ミッション

ンも積極的に参加する。

* 戦国BASARA *

徳川家康……徳川軍及び東軍総大将。肩書きは『東照権現』。太陽のような明るい性格。足はかなり速い。ミッションも積極的に参加する。

伊達政宗……奥州の独眼竜の異名を持つ。肩書きは『奥州筆頭』。英語も話すクールガイ。足は速い。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

真田幸村……武田軍に仕える若き虎。肩書きは『天覇絶槍』。純粹で熱血漢で破廉恥を嫌う。足はかなり速い。ミッションは参加する。

長曾我部元親……四国を支配する西海の鬼。肩書きは『天衣無縫』。快活で兄貴肌で面倒見がいい。足は速い。ミッションは参加する。

前田慶次……前田家に住む風来坊。肩書きは『絢麗豪壮』。恋を好み、幸せを望む。足は普通。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

鶴姫……未来を見通す予言の力を持つ。肩書きは『純白可憐』。純粹でやや世間知らずなところがあり、天然なところがある。足は普通。

NAMCO×CAPCOM

有栖零児ありすれいじ……『森羅しんら』のエージェント。クールで、物事を判断する。足はかなり速い。ミッションも積極的に参加する。

スタン・エルロン……ディムロスのソーディアンマスター。明るくて熱血漢。寝相はひどい。足は速い。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

ルーティ・カトレット……アトワイトのソーディアンマスター。レイズハンターで、金目のものに目がない。足は普通。ミッションは他人任せ。

のび太戦記

野比のびのび太……小学五年生。昔はぐうたらで、ダメ人間だったが、ある事件がきっかけで弱い自分を捨てた。足は普通。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

剛田たけし 武……通称「ジャイアン」。小学五年生。すすきが原のガキ大将でかなりの暴れん坊。足は遅い。ミッションは気分によって参加したりしなかったり。

骨川ほねかわスネ夫……小学五年生。骨川家のお金持ちで、玩具をたくさん持っている。足は普通。ミッションは他人任せ。

のび八ザ

みどりかわせいな
緑川聖奈……小学六年生。静香に変わるヒロイン。優しくて面倒見
がいい。足は速い。ミッションは参加する

おつが けんじ
翁峨健治……小学六年生。不良少年。足はかなり速い。ミッション
は人任せ。

やまだたろう
山田太郎……小学一年生。足は遅い。ミッションは他人任せ。

以上二十二名の逃げる者です。

登場人物　↳逃げる者↳（後書き）

次回は追う者を紹介しますWW

登場人物 く 追う者く (前書き)

今回は追う者……もといハンターを紹介します。

沙夜「ワクワクしちゃうわ？ 捕まえるの待ってたのよお」
片那「緊張します……」

登場人物 く追う者く

NAMCO×CAPCOM

沙夜^{さや}……森羅と対立する『逢魔^{おじま}』のリーダー。零児の額に傷をつけた張本人。

片那^{かたな}……沙夜の分身。寡黙で、命令は従う。

片那は量産型ですww

ユーリ&ユーニ……シャドルーのベガ親衛隊。肉体、精神強化されており、命令は従うように洗脳されている。

ユーリとユーニは二人一組となっています。

戦国BASARA

石田三成^{いしだみつなり}……石田軍及び西軍総大将。肩書きは『君子殉凶^{くんしじゆんきゆう}』。秀吉の左腕と呼ばれるほどの実力者。

大谷吉継^{おおたによしつぐ}……三成の親友及び西軍参謀。肩書きは『寥星跋扈^{りょうせいばつこ}』。三成の親友で、陰から三成をサポートする。

三成と吉継は二人一組となっています。

雑賀孫市……紀伊の雑賀莊の三代目頭首。肩書きは『煙鳥翔華』。
何にも媚びない誇り高き雑賀衆をまとめる。

猿飛佐助……真田幸村に仕える忍。肩書きは『蒼天疾駆』。飄々と
した態度とは裏腹に実力は優秀。

片倉小十郎……伊達政宗に仕える竜の右目。肩書きは『仁吼義侠』。
実力は高く、政宗を支える。

かすが……上杉謙信に仕えるくのいち。肩書きは『月下為君』。謙
信の剣として舞う。

登場人物 く追う者く（後書き）

女性のハンターも悪くないかとwww ペアの人は二組ですねw

孫市「石田と大谷が一緒か。フッフ、面白いな」

鶴姫「三成さんと大谷さん、似合ってますよお」（サングラスとスーツ姿の三成と吉継を見て目をキラキラさせている）

三成「……………」（顔を赤らめてネクタイを締めている）

吉継「さようか」

孫市「石田、貴様、照れているのか？」

三成「……………うるさい」

説明と紹介とオープニングゲーム(前書き)

今回は長いですよw

ハンターも喋りますよw

ネタバレも含まれます。

説明と紹介とオープニングゲーム

逃走中　　ゝ走れ！　カオスの世界ゝ

ゲームスタートまで

10 木実「わっ！　孫市さん!？」

純（石田）「木実！　ここは一旦別れよう!！」

木実「う……うん!！」

9 元親「ぎゃああああ！　何でこんな時に石田と大谷がああああ
あ!？」

家康「元親！　全力でやれ!！」

元親「俺はいつだって全力だ！　ぢぐじょおおおおおおお!
!！」

8 慶次「ここにかすがちゃんも孫市もいる……迂闊に動けねえな
……!！」

7 政宗「Noooooooooo!!　小十郎おおおおお!？」

6 佐助「あつ！　おい、かすがあー!！」

かすが「何だ、佐助!！」

佐助「逃走者、見つかった?！」

かすが「そういうお前こそどうなんだ?！」

5 吉継「見やれ三成、前方に前田がおる」
三成「刑部、追うか？」
吉継「逃走者を見つけたら追うのがわれらの役目よ」

4 のび太「どうしてこうなったのおおおおおお！？」
スネ夫「そんなの僕でも知らないよおおおおおお！」
ジャイアン「てめえらああああ！俺を巻き込むんじゃねえええええ！！」

3 零児「今は隠れて様子を見るか……」

2 ルーティ「スタン！なんとかしなさいよおおおおお！」
スタン「そんなこと言っただってええええ！相手は三成さんと吉継さんだよおおお！？」
というか、別れるって方法とかないのおおおお！？」

1 彰久「来るなあああああ！」

逃走者全二十二名は今回の舞台となる東京ドームの三倍位の広さ

である広場に集められた。

作者　葉月は二十二名の逃走者を呼び寄せて、ゲームのルール説明とハンターの紹介、エリアの説明などをした。

葉月「皆さん、本日は『逃走中』に参加していただき、誠にありがとうございました。このゲームは、ハンターから逃げながら賞金を稼ぐというものです。制限時間内に最後まで逃げ切ったら逃走者の勝利です。」

賞金は一秒ごとに二百円ずつふえます。制限時間は六十分。ただし、ハンターに捕まった場合は賞金はゼロです」

木実「これ、よくテレビで見てるからルール知ってますよ」

純（石田）「多分、最初は二体のハンターが放たれますよね？」

麻穂「でも、番組内容によってはルールが違うじゃん？」

元親「へえーそいつあ腕が鳴るぜ！」

木実、純、雪菜など現代人はテレビで逃走中を見ているので何となくルールを知っている。元親はワクワクしてどんなものなのか、楽しみで仕方がなかった。

葉月「続きまして、ハンターの紹介をしたいと思います」

一同「えっ!?!?　ハンターの紹介!?!?」

葉月「ハンター、カモン！」

本家ではなかったまさかのハンターの紹介に逃走者全員は驚愕した。

葉月の号令で、サングラスをかけた黒いスーツ姿のハンターが会場内に入場する。

木実「ハンターの紹介って聞いたことないよ!?!?」

雪菜「テレビでやってなかったよこれ!?!?」

彰久「しかもハンターに女の人がいなかったよね!？」

そう、本家は男性がハンターをやるものだが、今回は女性も混ざっている。テレビで逃走中を見ていた木実達現代人はまさか女性のハンターがいるとは全く知らなかったのだ。

ハンター「佐助」「えへへ、どうも」

幸村「佐助!？ どうしてお前が!？」

ハンター「佐助」「作者が俺様にどうしてもやれって言われてね、そういう結果になっちゃったわけ」

幸村はハンターである佐助にびっくりして、動揺を隠せなかった。

家康「三成、刑部、お前達のはんたあか。ちよつと厄介だな……」

ハンター「吉継」「徳川よ、われらは二人でやることとなった。まあ、逃げ回るときは精々頑張りやれ」

ハンター「三成」「言っておくが、手加減無しだ」

家康「勘弁してくれよお。お前達が一緒でしかも全力だと木実達が逃げ切れないよお」

政宗「小十郎、お前まで……」

ハンター「小十郎」「本当ならば政宗様をお守りしたいところです……今回は出来ません!」

葉月「じゃあ、ハンターの紹介をします。猿飛佐助、片倉小十郎、

石田三成、大谷吉継、かすが、雑賀孫市、沙夜、片那、ユーリ、ユーニです!」

ハンター「佐助」「まあ、そんなわけでよろしく」

家康達はまさかの三成達がハンターになっているのに思ってもみなかった。葉月は、ハンターを紹介すると、佐助は笑顔で頭を下げた。

元親「おいおい、サヤカまで石田達と同じかよお……………」

鶴姫「孫市姉さま、かっこいいですう」よく似合ってますよお

」

ハンター「孫市」「フッフ、私も本当は逃げる方がよかったが、追いかける側も悪くないな」

ハンター「三成」「孫市、貴様はどうする？」

ハンター「孫市」「どうって……………何をだ？」

ハンター「三成」「初めから家康達を追うか、途中から追加としてやるか……………」

葉月「それは私が決めますね　最初に追う方が沙夜、孫市、かすが、小十郎の四人です。ユーリとユーニ、三成と大谷さん、佐助、片那はミッション失敗時に追加される役になっています」

政宗「初っ端から石田と大谷は怖えよ！　つうか、こいつらが最初だったらstartしてすぐtouchされちまうだろうが！」

雪菜「ユーニとユーリも最初だったら終わってたよ……………」

葉月の発表をして、ハンターはそれぞれの位置に着く。政宗は三成と吉継の二人が最初に追いかける方だったらスタートしてから直ぐにタッチされるし、いきなり全滅させる恐れがあるから政宗は顔を青ざめながら突っ込んだ。雪菜もユーリとユーニが最初だったら終わってたと青ざめる。

ハンター「かすが」「お前達も位置に着け。私達がお前達を捕まえるからな」

零児「俺達もお前達から逃げ切ってみせる！」

木実「絶対に負けませんよ！」

逃走者とハンターの譲れない思い。彼等はそれぞれの位置に着き、ハンターの沙夜、孫市、小十郎、かすがの四人はハンターボックス

の中に入り、スタッフが鍵を掛けた。残りのハンターはそれぞれの場所で待機する。

それぞれの位置に着いたところで、葉月はオープニングゲームを始めようとした。

葉月「では、まずはオープニングゲームです！ オープニングゲームは、鎖を引くというものです。二十二本のうち、一本だけハズレの鎖が入っています。ハズレの鎖はハンターボックスに繋がっていますので、もしも引いてしまった場合は放出されてゲームスタートとなってしまうので注意してくださいね」

スタン「うわあ……ちよつと緊張するなあ……」

ルーティ「そのうちの一本だけハズレなのよね？ ハズレさえ引かなきゃいいんでしょう？」

太郎「怖い……」

ハンター「佐助」「はあゝい、くじ引きの時間だよ」

すると、ハンターである佐助がくじ引きの箱を持って逃走者達の前に姿を現した。

逃走者一同「佐助（猿飛）（さん）！？」

ルーティ「ちよつとあんた！ ハンターでしょ！？ 何でハンターのおんたが出てくるのよ！」

健治「何か企んでんだろ？」

スタン「ハンターってそんなことやったっけ？」

ハンター「佐助」「まあまあ落ち着きなよ。実は俺様の分身がね、あんた達を探し回ることになってんの。つまり本物の俺様があんた達見守ってるってわけ。まあ、下手に動くと思つかるから注意しなよ？」

ジャイアン「あーマジうぜえ！ 俺達を見つかけやすくするって反則じゃねえか！」

鶴姫（7）「七番ですか。最初の方ですね！」
零児（15）「十五か……まあ、位置的にはいい方が」
太郎（3）「マジで……三番とか勘弁して……」
スタン（8）「最初の方は勘弁してよお……」
ルーティ（19）「あとの方がやばくない？」
ジャイアン（1）「うっわあああ！ 最悪だ！ 俺が一番最初かよ
お！」
スネ夫（17）「十七番……ビミョーな位置……」
雪菜（16）「十六番だ！」
孫尚香（14）「十四番か……まあ、いいほうかな？」
稲姫（22）「一番最後ですか……」
麻穂（4）「ふがぁ、最初の方〜!？」
彰久（20）「一番終わりの方が怖いよね？」
幸村（5）「おお！ 五番引いたぞ！」
政宗（21）「lastの方が……まあ、いいけどな」
元親（6）「おいおい、六番かよ」
聖奈（12）「十二番ね。半分かしら？」
健治（18）「最後に近いほどやばいよな？」

結果はこういう順番に決定する

- 一番、ジャイアン
- 二番、慶次
- 三番、太郎
- 四番、麻穂
- 五番、幸村
- 六番、元親
- 七番、鶴姫

八番、スタン
九番、家康
十番、純
十一番、のび太
十二番、聖奈
十三番、木実
十四番、孫尚香
十五番、零児
十六番、雪菜
十七番、スネ夫
十八番、健治
十九番、ルーティ
二十番、彰久
二十一番、政宗
二十二番、稲姫

緊迫とした空気の中、逃走者達はジャイアンを見守る。

木実（13）「武君、頑張れー！」
スネ夫（17）「ハズレ引いたら許さないからね！」
純（10）「いきなりハンターというパターンもあるから気を付けて！」
ジャイアン（1）「間近で見ると怖いぜ……。女とはいえ、ハンターは怖いわ……」

四体のうち小十郎以外全て女性のハンター。しかし、彼女達もなかなか侮れない相手だ。

ジャイアンは間近で見る四人のハンターに恐怖しながら鎖の色を

選ぶ。

のび太（11）「ジャイアン、何色選ぶ？」

ジャイアン（1）「オレンジ選ぶぜ！」

葉月「おお！ オレンジか！」

ジャイアンはオレンジ色の鎖を選び、手に掛ける。

クリアか

あるいはハンター放出か

ジャイアンはオレンジ色の鎖を引いた。ハンター放出はされなかった。ジャイアンはクリアした。

24

ジャイアン（1）「よっしゃあ！ クリアだ！」

家康（9）「成功すると逃げる事が出来るのか」

ジャイアン（1）「じゃあ、俺、先行つてくるぜ！」

クリアしたジャイアンはそう言って遠くまで走った。

無事に鎖を引き抜けば、離れたところからスタートできる。

残る鎖はあと、二十一本。

ジャイアンの次、二番は慶次。慶次は軽快に足を運んでハンターボックスの前に立った。

慶次（2）「俺は……そうだな……桜色いくよ！」

慶次は桜色の鎖を手に掛ける。

慶次（2）「あーちよつと怖くなってきたな……」

クリアか

あるいはハンター放出か

零児（15）「みんな、すぐ逃げる準備をするんだ！」

零児は他の逃走者達にハンターに備えて呼び掛ける。

慶次は桜色の鎖を思いつ切り引いた。

ハンターは放たれなかった。慶次はクリアした。

慶次（2）「やりい！じゃ、先に行ってくるわ！」

慶次はクリアして遠くまで走った。

クリア

残る鎖はあと、二十本

聖奈は太郎の確保にシヨックする。

ジャイアン「相手がハンターじゃあいつ敵わないよな……」

ジャイアンは太郎がハンターに敵わないと分かりきっていたが、直ぐに捕まるとは思ってもみなかった。

スタン「怖いなあ…… 開始して数十秒で捕まるって速すぎるよお……」

ルーティ「女の人でもやれるってのがすごいわね……」

〈牢獄〉

ハンター「三成」「随分とあつけなかつたな。小童」

太郎「だつてえ……速すぎるもん……」

ハンター「三成」「まあな。孫市や上杉の忍は女だが、足が速いからな。逃げ切れる者がいるかどうかだな」

太郎「お兄ちゃん達はまだなの？ 出番」

ハンター「三成」「私達はまだ先だ」

ハンター「吉継」「みっしょんに失敗した際に追加することになっておる。それまでは待機よ」

牢獄に閉じ込められた太郎は体操座りをして涙目になっていた。出番がまだ先である三成と吉継は太郎と会話した。

牢獄の隣に葉月と佐助は映像を見ていた。逃げ惑う逃走者達と追いかけるハンター。

葉月「ハンターも容赦ないなあ……」

ハンター「佐助」「そうでしょ。まあ、今んどこかすがにかなうやついないっしょ。あいつ、はんだあで一番速いからね?」

葉月「佐助も結構速いよ。忍だしさ。でも、これからミツシヨンをやるけど、失敗したら最初はユーリとユーニが来るからね?」

ハンター「佐助」「アイツらも足速いの?」

葉月「元々普通の女の子だったけど、ベガって奴に洗脳されてて肉体的にも精神的にも強化されてるから速いと思うよ」

ベガとは、ストファに登場するサイコパワーを駆使するシャドルーの総帥のことである。

葉月「もつと鬼畜なのは、片那とか三成と大谷さんだね。あれはもう、逃走者に勝てる気がしないww」

ハンター「佐助」「そうそう、石田の旦那は馬より足速いからねえ。大谷の旦那の支援も厄介だねえ」

葉月と佐助は、特に三成と吉継のコンビを逃走者はどう逃げ切るかを解説する。

逃げ惑う逃走者

迫り来るハンター達

制限時間は六十分 一秒二百円単位に賞金は増加する 賞金は逃げ切れば七十二万円

ただし、ハンターに捕まればゼロ

東京ドームの三倍くらいの広さを持つ広場にて逃走者は逃げ回る

自首は電話ボックスで報告可能 ただし、自首すればペナルティとしてハンターは一体追加する

賞金を賭けた恐怖の逃走劇が今、始まる！

『逃走中 ～走れ！ カオスの世界～』

説明と紹介とオープニングゲーム（後書き）

家康「まさか猿飛がはんだあと進行役をやったとはな……」

木実「かすがさんは今のハンターの中で一番厄介な相手かも……」。

足も速いし、見つけたらすぐ行動するから怖いな……」

彰久「女の人でもハンターは怖いのは分かったよ（´・`・´）」

M I S S I O N 1 (前書き)

ミッション1です。あっさり終わりますww

MISSION 1

今回の舞台は東京ドームの三倍の広さを誇る広場。この場所で逃走者は四体のハンターから逃げることになる。

賞金は一秒ごとに二百円増える。これを六十分逃げ切れれば賞金は七十二万円を獲得することができる。ただし、四体のハンターに捕まれば、賞金はゼロとなる。

木実「逃走中はテレビで見たことあるけど、実際にやってみるとハンターの恐ろしさがよく分かりますね。というよりはテレビよりも怖いかも……」

木実は逃走中をテレビで見たことがあるため、ルールは知っていたが、ハンターの中でも女性のハンターというのは初めてだし、しかも女性のハンターも男顔負けの素早さを持っているのを知った。

雪菜「ハンター怖い……あんなに速いとは思わなかったもん……」

雪菜は草原の茂みに隠れてハンターの恐ろしさを知る。

家康「時間を過ぎる度に金が貰えるのは嬉しいな」

一秒二百円増加に家康は嬉しさのあまり笑みをこぼす。

すると、逃走者達に一通のメールが送られてきた。

元親「おわっ！？ 脅かすんじゃないよ！ 音でけえっての！」

スネ夫「ミッションだ……！」

鶴姫「噴水付近にハンターボックスが設置された。ハンターボックスの中には二体のハンターが入っている。残り四十分以内にボックス付近のレバーを引かなければ、二体のハンターが放出される」
零児「ただし、レバーを引くときは二人同時でやらなければならない。急ぎたまえ」二人同時か……」

MISSION 1 ハンター放出を阻止せよ！

噴水付近に二体のハンターを入れたハンターボックスが設置された。

残り時間四十分になると二体のハンターが放出される。それを阻止するには、ハンターボックスの隣のレバーを二人同時に引かなければならない。

のび太「やっぱり他の人に任せよう。下手に動くとハンターに見つかっちゃうし」

のび太はリスクのことを考えてミッションをやらないことを決めた。

スタン「動いたらまずいな……やりたいけど、やっぱり俺、逃げます！」

スタンもまた、身の安全のために逃げることを選択した。

ルーティ「他の人に任せるわ。あんなのやったら絶対ハンターに捕

まっちゃんじ」

ルーティもリスクのことを考えて他の逃走者に任せた。

雪菜「えー！？ あたし、行きたくないよぉ！ 怖いもん！」

雪菜は既にハンターの恐怖を知り、怯え始めた。

彰久「迂闊に動けないよね……」

物陰に隠れながら、彰久はミッションを行かないことを決めた。

次々と辞退する逃走者だが、一人の男は違った。

零児「やはり、行くしかないだろう。ハンターを止める！」

零児はリスクを顧みず、ミッションに挑む。動けばハンターに見つかるリスクも高まる。

木実「絶対に行くよ！ 何としてもハンターは増やしたくないから！」

木実はハンターが増えるのを恐怖して、自分の身よりもミッションを選んだ。

家康「ワシは行こう！ 皆に迷惑を掛けたくないからな！」

家康も勇気を振り絞り、ミッションに挑む。

現在ミッションに挑むのは木実、零児、家康の三人だけである。ちなみにハンターボックスの近くにいるのは家康だった。家康はハンターを警戒しながら携帯電話を取り出して元親に電話をかけた。

元親「ん？ 何だ？ 家康から着信？」

元親は家康の着信に携帯を取って通話した。

元親「もしもし、家康？ 何の用だ？」

家康「元親、お前、今どこにいる？」

元親「んあ？ ああ、そうだな……噴水のところにいるが？」

家康「よかった！ 元親！ お前はここでまっててくれ！ ワシも直ぐに行く！」

家康は元親が噴水付近にいるらしく、喜び、彼に待機するように伝えた。伝えると家康は電話を切り、元親が待つ噴水付近に向かった。

家康「よかった……元親が噴水の近くにいるとは！」

一方、木実はハンター・孫市を見て動けないでいる。

木実「何でこんな時にハンターが！？」

孫市は砂場を歩き回り、逃走者を探している。木実にはまだ気づいていないようだ。

木実「あっち行け！ 行けっば！」

木実は右手を振って孫市に行ってもらおうように願った。しかし、

孫市は一步も動くこともなく逃走者を探しているところだった。

家康「はあ、はあ……元親！ 待たせたな！」

元親「おう！ 家康！」

家康は走って元親のいる噴水付近に来て、元親と合流した。幸い家康が向かう時にハンターは一人も来ておらず、合流したときは共に喜び合った。

喜び合ったのも束の間、家康と元親はそれぞれハンターボックスの前に立ち、家康は右のレバーを、元親は左のレバーを引くこととなった。家康と元親は顔を見合わせて笑顔で頷き、一斉にレバーを引いた。

家康・元親「せえーの！」

ミッションコンプリート

家康と元親は同時にレバーを下に引き、ハンターボックスを封印して二人のハンター放出を阻止することに成功した。

元親「やったな！ 家康！」

家康「ああ！」

家康と元親はミッションに成功し、ハイタッチをした。

家康と元親によるミッション成功で他の逃走者に一通のメールが送られてきた。

のび太「音でかいよ……メール？」

純（石田）「『徳川家康、長曾我部元親の活躍によってハンター二体の放出を阻止した』家康さんと元親さんがやってくれたんだ！」

木実「家康さん、元親さんありがとう〜！」

（牢獄）

太郎「家康お兄ちゃんと元親お兄ちゃんがやってくれたんだ！すごいなあ……」

ハンター「吉継」「やれ、徳川と長曾我部め、やりおるわ」

ハンター「三成」「家康と長曾我部がやったのか……」

ハンター「吉継」「三成、われらの出番はもうすぐか？」

ハンター「三成」「いや、まだだ。葉月曰く中盤らしい」

ハンター「吉継」「さようか。ならば暫しの間まちと休むか？」

ハンター「三成」「貴様の好きにしろ」

牢獄付近で三成と吉継は地面に座り、出番が来るまでの間休息をとった。

家康「やったな、元親！ 成功したぞ！」
元親「これでみんなも喜ぶだろうぜ！」

ミッションを成功した家康と元親は達成感があり、共に喜び合った。

一方、孫尚香と稲姫の二人は隠れる場所を探していた。何故なら、ハンターに見つかれば追われる身になってしまうからだ。だが、背後からはハンター・小十郎の姿があった。

ハンター「小十郎」……………見つけたぜ、逃走者」

視界に彼女達の姿を捉えた。そして、全力疾走で彼女達に向かって駆け抜けた。しかし、二人はまだ小十郎に追われていることに気づいていない。後ろを向いて先に気づいたのは稲姫だが、既に遅かった。小十郎の両手が孫尚香と稲姫の肩を軽く乗せた。

稲姫「きゃあっ!?!」

孫尚香「きゃっ!?!」

孫尚香、稲姫、確保 残り十九人

不意に背後から近づかれてはさすがに気づきにくかった。

孫尚香「もう、何よ！ もう終わり!?!」

稲姫「背後からだなんて……………全く分かりませんでした……………」

ハンター「小十郎」「悪いがこれでオメエらの出番はもう終わりだ。残念だったな」

孫尚香「うう……」

稲姫「もうやれないなんて……悔しいです……」

孫尚香と稲姫はもう出来ないということに落胆した。

孫尚香と稲姫が確保されたメールは他の逃走者に送られてきた。

木実「『孫尚香、稲姫確保。残り十九人』!? 二人も!？」

純(石田)「尚香ちゃんと稲が捕まった……!」

彰久「二人も確保しちゃったの!? こんなテレビでやってた!？」

孫尚香と稲姫の確保に逃走者は動揺を隠せなかった。しかし、それだけでは終わらなかった。一通のメールが逃走者に送られてきた。

零児「来たか……! ミッション2!」

麻穂「マナーモードに出来ないの、これ? 音うるさいんだけど」

のび太「『これから君達は二人一組となって、写メールを送信しなければならぬ』」

雪菜「『残り三十六分以内に送信しなければ強制失格となる』!?'
強制失格!？」

政宗「What!?! 強制失格!?!」

元親「おいおい、強制失格って冗談じゃねえよ!」
家康「強制失格か……厳しいな」

今のところ二人一組で出来ているのは家康と元親のみだ

麻穂「強制失格!?! 嘘でしょ!?!」

スネ夫「『なお、一人何回でも写メールを写しても構わない』。強制失格はやめて欲しいな……」

逃走者誰もが「強制失格」という言葉に動揺を隠せなかった。そう、このミッションを成功しなければこの時点で強制失格になってしまうのだ。

MISSION 2 ツーショット写真を写メールで送信せよ!

逃走者はこれから二人一組を作り、ツーショット写真を撮って送信をしなければならぬ。尚、一人何回でもツーショット写真を撮ることが出来るが、同じペアは撮ることが出来ない。

残り三十六分以内にツーショット写真を送信しなければ強制失格となる。

元親「なあ、家康。お前、他の奴らもここに呼ばねえか? ここ、意外にもはんだあに見つかりにくいぜ」

家康「ああ、同じ二人組は作れないからな。だが、一人何枚でもいいんだろ?」

強制終了まで、あと十二分

MISSION 1 (後書き)

「牢獄Deトーク」

稲姫「はあ」

太郎「あ、尚香お姉ちゃんに稲お姉ちゃん」

孫尚香「背後から来るのって反則じゃないの!？」

稲姫「しかも、隠れる場所を探しているところで片倉様に捕まってしまうたんです……」

太郎「大変だったね。僕なんか鎖引いて追いかけてすぐ捕まっちゃったよ」

ハンター「吉継」「葉月曰くそれはよくある光景とのことだ。気づかぬうちに確保されるというのもよくあるぞ?」

稲姫「ずるくないですか!？ 私達の背後から来るって!」

ハンター「吉継」「今度のはちいと厄介な内容よな」

太郎「写メールを送信しないと強制失格になるやつでしょ?」

ハンター「三成」「強制失格という条件付きは奴らも厳しいではないか?」

果たして、逃走者は無事に写メールを送り、強制失格を免れるのか!？

MISSION 2-1 (前書き)

ミッション2其の一です。強制失格を免れるのか!?

MISSION 2 | 1

雪菜「ええ〜!?! ツーショット写真を送らなきゃ強制失格!?!
あたしも動かなきゃダメなの!?!」

このミッションは失敗すると強制失格になるため、嫌でも動かなくてはならない。雪菜はハンターに警戒しながら隠れていた場所を出て、人を探した。

スネ夫「強制失格……嘘でしょ……?」

スネ夫はミッションの内容に相当ショックを受けていた。スネ夫は携帯電話を持って、ジャイアンに電話をかける。

ジャイアン「何だよ? 電話か?」

ジャイアンはスネ夫から電話が掛かって、すぐさま電話を出た。

ジャイアン「もしもし?」

スネ夫「もしもし、ジャイアン?」

ジャイアン「スネ夫? お前どこにいるんだよ? 俺は森林のあるところにいるぜ」

スネ夫「森林か……僕は砂場のところのベンチだよ。森林とここはちよつと距離があるから近い人に掛けるね」

ジャイアン「ああ、分かった。お前、ハンターに捕まるんじゃないぞ?」

スネ夫「分かってるよ!」

スネ夫とジャイアンの距離はやや遠く、出会うまでに強制失格が近づいてくる危険性がある。また、動けばハンターに遭遇するリスクも高まる。

今度はスネ夫の携帯電話が着信で送られてきた。

スネ夫「何なの……？」

電話に出てみると、電話の主は家康だった。

スネ夫「家康さん!？」

家康「スネ夫か？ ワシらは丁度みつしよんを終えたところだが、元親がまだらしい。お前は今、どこにいるんだ？」

スネ夫「砂場のベンチですよ……。家康さんは今、どこにいるんです？」

家康「ワシか？ 噴水の近くにいますか？ 丁度よかつたな！ ここから近いよ！」

スネ夫「分かりました！ 今すぐ行きます！」

スネ夫はそう言うと、電話を切って家康達が待つ噴水付近まで走って向かおうとしたところ、木実が通りかかる。

木実「スネ夫君？ どこに向かうの？」

スネ夫「噴水だよ。家康さんから電話があつたよ」

木実「噴水？ 君も？」

スネ夫「えっ？ 木実姉も噴水なの？」

木実「うん、私もだよ。元親さんから電話があつて、これから向かおうとしてたところなんだ」

スネ夫「偶然じゃん！ 一人何回でも写メ出来るから組み合わせを変えれば行けるよね！」

木実とスネ夫は向かう場所が同じであることに偶然であった。木実とスネ夫は家康と元親が待つ噴水のところまで走って向かった。もちろん、ハンターにも警戒しながら行かなければならない。

強制失格まで、あと十分

一方スタンとルーティは既にスタンがミッションコンプリートをしているので、あとはルーティがミッションクリアをしていない。なのでルーティの相手をスタンは探しているところだった。

ルーティ「スタン！ 早くしなさいよ！ このままじゃあたし強制失格になっちゃうわよ！」

スタン「分かってるよ！ だから探してるんだ！」

ルーティは強制失格になることを嫌い、しかも苛立っている。すると、零児と純がスタンとルーティにはったりと会った。

スタン「零児さん、純君！ 来てたんだ！」

零児「俺もちょうど純と出会って写メールを送ったところだ」

ちなみに零児は純と出会い、写メールを撮って送信してミッションクリアをしている。純はまだミッションをクリアしていないため、速く誰かとツーショット写真を送信しなければならない。

純（石田）「スタンさん、写メ、お願いしますね」

スタン「ああ、分かった！」

純とスタンは二人の写メを送り、ミッションをクリアした。ルーティも零児と写メを撮り、送信したのもうこの四人全員がミッションクリアになった。

だが、彼らの横にはハンター・かすがが迫っていた。先に気づいたのは零児で、純、スタン、ルーティを連れて走って向かった。だが、かすがは彼らに気づくこともなくキョロキョロと周りを見渡しているだけだった。

純（石田）「危なっ！？ さっきのかすがさんでしょ！？」

零児「あいつに追われたら一溜りもないな……」

スタン「確か、今のハンターの中で足が速かったっけ？」

ルーティ「逢魔のアイツも油断できない相手ね」

逢魔のアイツとは、沙夜のことだ。沙夜は逃走者を探しているがすがに声を掛ける。

ハンター「沙夜」「お嬢ちゃん、見つからないの？ さっきあつちに誰かいたじゃないの？」

ハンター「かすが」「貴様に言われる筋合いはない。そういう貴様こそどうなんだ？ 見つけたのか？」

ハンター「沙夜」「逃走者らしき影を見つけたんだけど、人違いだったかしら？」

ハンター「かすが」「人違いならば仕方ない。他にあたるぞ」

ハンターは神出鬼没。いつ現れるのか分からない。

健治「はあ……強制失格か……これだけはやめ……」

健治は強制失格の言葉に恐怖して、怯え言いかけたその時、小十郎が健治の肩を乗せて確保されてしまった。

健治「はあ！？ ハンターかよ！？ しかも気配もなしに近づくんじゃねえよ！」

ハンター「小十郎」「俺に気づかねえテメエが悪い。もうちっと警戒心を持ちやがれ」

健治「は！？ 気づけねえよそんなの！ つうかあんた、幽霊みえに出てくんなよ！」

ハンター「小十郎」「テメエが鈍感なだけだ」

健治の言葉も虚しく、小十郎の一言で一蹴された。

翁峨健治確保、残り十八人

健治の確保に逃走者にメールが送られてきた。

慶次「おいおい何やってんだよ健治w」

慶次は健治の確保に鼻で笑った。

慶次「というか、誰かいないのかねえ……」

まだミッションをクリアしていない慶次は人を探しているところだった。ハンターにも警戒しつつ、相手を探していた。

強制失格まで、あと八分

MISSION 2-1 (後書き)

はたして、逃走者は間に合うのか？

MISSION 2-12 (前書き)

今回はまた確保者が現れますw

木実「本家の逃走中でも実際次々と捕まっていたよね？」

MISSION 212

「牢獄DEトーク」

ハンター「吉継」「あ、また来おったわ。よう来たのう」

健治「ハンターの奴、幽霊みてえに現れやがって……何が鈍感だ！
これじゃ誰でも気づけねえよ！」

未だに小十郎の言葉に根に持つ健治。不機嫌な顔をしながら牢獄の中に入った。

ハンター「三成」「貴様もご愁傷さまだな」

稲姫「あなたもそうやって捕まったのですね。私達も背後からでしたよ」

孫尚香「そうそう、気づかないように近づいてくるんですもの！」

太郎「あはは、健治兄ちゃんご愁傷さま」

健治「背後からって反則だろ……」

ハンター「吉継」「次から次へとまあ、捕まりやる」

家康「木実！ スネ夫！ こっちだ！」

家康は大きな声を上げて木実とスネ夫をこっちだと呼び掛ける。家康の声に気づいた木実とスネ夫は走って彼らのところに向かった。ちなみにこの時は木実がスネ夫とツーショット写真を送信しているため、ミッションをクリアしていないのはスネ夫である。

また、家康と元親も家康はクリアしているが、元親はまだミッシ

ヨンをクリアしていない。残り七分三十秒でスネ夫も元親も強制失格となる。

元親「木実！ 早く撮ろうぜ！」

木実「はいっ！」

木実と元親はツーショット写真を撮り、メールで送信し、元親はミッシヨンをクリアした。

スネ夫「家康さんも早く撮りましょう！」

家康「ああ、そうだな！」

元親に続き、家康とスネ夫も写メを撮る。ツーショット写真を写メで送り、スネ夫もミッシヨンをクリアした。そして、四人はミッシヨンをクリアをし、安堵の表情を浮かべた。

スネ夫「危なかった……。家康さん達が居なかったら強制失格だったよ……」

木実「間に合ってよかったね」

元親「俺も危なかったぜ……」

家康「これで皆強制失格を免れたな！」

これから四人は共に行動し、ハンターにも見つかりにくい場所で物陰に隠れた。だが、木実、家康、元親、スネ夫の四人は大きな声で会話することが出来ず、できるだけ小さな声で話し合う。

木実「ハンターは……来ないよね……」

スネ夫「来てもやり過ぎるでしょ？」

家康「次のみっしょんが来るまではここで待つか」

元親「まあ、こっちに人が来たら手伝うがなあ」

だが、木実、家康、元親、スネ夫の近くにはハンター・孫市が通りかかる。四人は孫市の存在に気づき、できるだけ体を小さく屈めた。緊迫とした中、孫市は逃走者を探している。木実達に気づかず、そのまま通り過ぎていくのだった。

元親「サヤカじゃねえかよ！ こっちにも来るじゃねえかよ！ 危ねえな！」

木実「でも、こっちに気づかなくてよかったなあ……」

家康「そのままやり過ぎすというのもありだろ？」

スネ夫「危なかったあ……」

四人は孫市が通り過ぎたことを安堵する。

一方、麻穂は時間を見ながら人を探しているところだった。

麻穂「あと七分……！ 誰かいないの!？」

すると、偶然にも幸村、政宗、慶次の三人に出会った。政宗は幸村と写真を撮り、慶次は政宗と写真を撮り、写メールを送っているため、ミッシヨンクリアをしている。クリアをしていないのは麻穂と慶次の二人のみである。

政宗「Oh、麻穂じゃねえか。偶然会ったな！」

麻穂「政宗さん、幸村さん、慶次さん！ 写真、撮ってください！」

慶次「俺は独眼竜と写真を撮るよ。麻穂ちゃんは武田の若虎と一緒にどうだ？」

幸村「そ……それがしが麻穂殿と!？ 何とも破廉恥でござるうう

うっうっ！」

慶次「いやいやいやいや！ 写真を撮るってことだよ！ というかあんた何変なこと考えてんの！？」

幸村は元より女性が苦手なのか、麻穂と接近するだけで顔が真っ赤になり、「破廉恥でござるうっうっ！」と叫んだ。慶次は幸村に麻穂と写真を撮ることだと突っ込んだ。

幸村「申し訳ござらぬ！ つい、叫んでしまっつて！」

麻穂「いえ、いいですよ。じゃあ、写真撮りますね」

麻穂は幸村に写真を撮ろうと声を掛け、幸村は彼女の言葉に応じた。麻穂は幸村とツーショット写真を撮った後、写メールで送信をしてミツシヨククリアし、強制失格を免れた。

また、慶次も政宗とツーショット写真を撮り、メールで送信してミツシヨククリア。強制失格を免れた。

麻穂「ありがとうございます！ おかげで強制失格を免れました！」

慶次「まあいいよ。俺だつてあと六分で強制失格だったしね」

政宗「ま、とりあえずみんなclearしてよかつたぜ」

喜びも束の間、彼らに接近しているのはハンター・小十郎である。

小十郎は麻穂、政宗、幸村、慶次を見つけて走り出す。

政宗「アンタ達も頑張つて……つてNoooooooooo！！ 小十郎おおおおお！？」

先に気づいたのは政宗で、絶叫を上げながら逃げる。

麻穂「えっ！？ どうしたんですか、政宗さん！？」

慶次「竜の右目だよ麻穂ちゃん！ 早く逃げるよ！」
幸村「何故このようなときに片倉殿が来るのでござるか!？」

麻穂、幸村、慶次も小十郎を見て、一斉に走り出す。それぞれ曲がり角を使い、小十郎を翻弄する。だが、小十郎が視界を捉えたのは……。

麻穂「うちいいいいい!？」

麻穂だった。

麻穂は全力疾走で小十郎から逃げようとするが、距離は徐々に縮まっていく。

麻穂「やだあああああ！ いやあああああ!！」

悲痛な叫びも虚しく、麻穂は小十郎に確保されてしまった。

日下部麻穂確保、残り十七人

麻穂「はあ、はあ、はあ……もう、やだあ……。せつかくクリアしたのにい……」

麻穂は地面に寝転がり、右手で顔を覆った。

麻穂の確保情報はメールで送られてきた。

木実「『日下部麻穂確保、残り十七人』！ 麻穂さんが捕まった！

？」

家康「意外な者も捕まってしまうのか……怖いな……」
スネ夫「麻穂姉はもつと残ってるはずなのになあ……」
元親「逃走中ってそんなに恐ろしいやつだったのか？」

体力のある麻穂でさえハンターに捕まってしまうのが、逃走中の恐ろしさである。また、ハンターに勝る俊敏の人でも捕まってしまう場合もあるのだ。

強制失格まであと五分五十秒

MISSION 2-2 (後書き)

次回、凶王が動き出します！

吉継「葉月よ、われも忘れるな」

MISSION 2 - 3 & 通達 1

強制失格まであと六分を切った頃、未だにミッションをクリアをしていないのは鶴姫、のび太、彰久、ジャイアン、聖奈、雪菜の六人。

鶴姫「誰かあー！ 誰かいませんかあー！」

鶴姫は大きな声を上げて人を探していると、背後からはハンター・孫市が近づいていた。

鶴姫「早く来てくださあ い！ このままじゃわたし、強制失格になっちゃいますよお！」

ハンター「孫市」「姫、声が大きいぞ。それでは私にも聞こえるではないか……」

孫市でも聞こえる鶴姫の高い声は人を求めるものだった。だが、ほとんどの人はクリアをしているため、共に行動することが多いのか、あまり人が少ないのだ。

鶴姫「誰かいますせ……ひゃあっ!？」

振り向くと孫市がいて、今にも逃げ切れるのは皆無。可愛らしい声を上げて鶴姫は目を見開いて驚いた。

鶴姫「孫市姉さま!？ どうして……!？」

ハンター「孫市」「どうしてと言われてもな、あれだけ声が大きいと私も聞こえる」

鶴姫「ごめんなさい……急いでいましたから……」
ハンター「孫市」「だが、残念だったな姫。私に会って、しかも至
近距離ならば逃げられまい」

孫市はそう言いながら鶴姫の肩を乗せて彼女を確保する。

鶴姫「うう……」

鶴姫確保、残り十六人

鶴姫の確保情報についてのメールが送られてきた。

純（石田）「鶴ちゃん確保！ 残り十六人！」

零児「このままではまずいな……。確保のペースが速い……」

ルーティ「このペースじゃ全滅になる可能性が高いんじゃないの！
？」

スタン「俺達もいつか捕まるかも……」

確保のペースが速いことに逃走者は恐怖を抱く。このままだと全
滅になる可能性は高いだろう。

また、未だにツーショット写真を送っていないのは野比のび太、
土岐彰久、剛田武、真田雪菜、緑川聖奈の五名。彼らも五分三十秒
までに送らなければ強制失格となる。

彰久「残り五分半……誰かいないかな……？」

彰久は周りをキョロキョロしながら他の逃走者を探している。

彰久「このままじゃ僕、強制失格になっちゃうよお……………」

時間を見ながら彰久は焦りを見せる。残り五分半を切つて、未だにクリアをしていないのだ。

偶然にも、小十郎から全力疾走で逃げてきた政宗に出会った。

政宗「はあ、はあ……………はあ……………ここまで来れば大丈夫か……………」

彰久「ま……………政宗さん？」

息絶え絶えの政宗に彰久は声をかけると、政宗は地面に跪いて息を整えながら彰久を見た。

政宗「Ah? 彰久か? 偶然だな……………」

彰久「あの……………政宗さん、何で走ってきたんですか？」

政宗「アイツだよ……………小十郎がオレ達を追つてきやがったんだ! それで、幸村とも、麻穂とも、前田の風来坊とも離れ離れになつちまった……………。麻穂は確保されてしまったがな……………」

彰久「じゃあ、小十郎さんがこつちに来るつても考えられますね」

彰久は政宗にツーショット写真をお願いし、政宗は承諾した。

彰久「あの、一緒に写真を撮りませんか? もう時間がないもんで……………」

政宗「OK、彰久。一緒に撮るぜ」

彰久は政宗とツーショット写真を撮り、メールで送信をした。これで彰久もミッションクリアし、強制失格は免れた。

ジャイアン「雪菜姉！ のび太！ 聖奈さん！ それぞれ写真を撮ってメールで贈ろうぜ！」

雪菜「そうだね！ ペアを作って行こうよ！」

聖奈「武君も考えたわね」

のび太「丁度四人揃ってるしね」

その時、雪菜、のび太、ジャイアン、聖奈の四人は偶然にも出会い、写真を撮る際の組み合わせを決めていた。

雪菜とジャイアン、のび太と聖奈の組み合わせの後、雪菜と聖奈、のび太とジャイアンの組み合わせでツーショット写真を撮ってミッションコンプリートした。

こうして、十六人の逃走者達は強制失格を免れた。

ミッションクリアのときのメールが逃走者に送られてきた。

のび太「『全員ツーショット写真を送信することに成功。強制失格は免れた』。はあ……よかったあ……」

純（石田）「みんな成功したんだ！ のび太君か雪菜ちゃんあたりが強制失格になってそうな感じだったけど……」

ルーティ「まあ、確保されちゃった人も多かったけどね」

強制失格を免れたことに逃走者は安堵した。

〈牢獄DEトーク〉

ハンター「吉継」「麻穂、かんなき巫、よう来たのう」

麻穂・鶴姫「……………」

麻穂と鶴姫は魂が抜かれた様に放心状態になっている。

鶴姫「大谷さあん、わたし、何も動けずに捕まっちゃいましたあ…

…」

ハンター「三成」「どうせ孫市に、であろう？」

鶴姫「三成さん、どうして分かったんですか！？ わたしが孫市姉さまに捕まっちゃったってことも！」

ハンター「三成」「普通ならば我らを見たら逃げるのが逃走者だ。貴様は孫市を見ても動かなかった」

鶴姫「振り向いたら孫市姉さまがいたんですよ。だから……………逃げる事が全く出来ずに、無残な結果で終わっちゃったんです」

ハンター「吉継」「なるほどな。ぬしは雑賀を見たときに何も出来なかつた、というわけか」

孫尚香「これは一番最悪な終わり方ね……………何も出来ずに捕まるってのは」

稲姫「背後から捕まるより最悪ですね……………」

鶴姫は放心状態になり、涙目になりながら牢獄の中に入る。鶴姫に続いて麻穂も牢獄の中に入った。

太郎「麻穂お姉ちゃんはなんで捕まつたの？」

麻穂「うちはね、政宗さんと幸村さんと慶次さんと一緒にそれぞれツーショット写真を撮った後でね、最悪にも小十郎さんに見つかつ

て捕まっちゃった」

健治「ミツシヨククリアした直後にハンターってずるいな」
太郎「これも一番嫌なパターンだよな」

すると、確保者に一通のメールが送られてきた。

ハンター「吉継」「ん？ 何ぞ？」

麻穂「メールだ……」

孫尚香「麻穂、内容は何？」

麻穂「逃走成功するのを予想するやつだよ！」

太郎「じゃあ、僕達が予想して、当たったらお金が貰えるんだよな？」

そう、確保者は今残っている十六人の逃走者の中で誰が逃走成功するのかを予想するものだった。

そこで、葉月も佐助も今残っている逃走者のカードを持って牢獄の前に立つ。

葉月「じゃあ、これから逃走成功の予想をする時間ね」

ハンター「佐助」「一体誰が逃走成功するのか予想しなよ？」

確保者は誰が逃走成功するのか予想する。

* 通達 1 逃走成功者を予想せよ！*

確保された逃走者は今現在残っている十六人の逃走者の中で逃走成功をするのかを予想する。

見事に予想を的中すれば、賞金五万円がもらえる。

葉月「まずは太郎、誰が逃げ切れると思う？」

葉月は最初に太郎を指名する。指名された太郎は初めは戸惑うも、逃走成功者の名前を挙げた。

太郎「零児お兄ちゃんか、純お兄ちゃんかなあ……？」

葉月「なるほどね……純君も零児もきつと最後まで逃げ切れるだろうというんだね？」

太郎「うん。あの人達足も速いし、ハンターを振り切ってくれそうだし」

葉月「じゃあ、次は鶴ちゃん」

鶴姫「わたしは……家康さんに逃げ切ってもらいたいですね！」

葉月「鶴ちゃんは家康か……ハンター見つかったても振り切ってくれそうだよな」

鶴姫「はい！ 孫市姉さまでも振り切ってくれそうですし！」

葉月「次は尚香」

孫尚香「私は木実か純が逃げ切れると思うわ」

葉月「木実ちゃんと純君が逃げ切れるのか」

孫尚香「木実は、ちゃんと物陰に隠れてやり過ごせると思うし、純は足が速いからにはんだあに遭遇しても撒いてくれそうだから」

葉月「次は稲」

稲姫「稲はやつぱり家康様か、純だと思います」

葉月「家康と純君か……というか、純君多いな！」

逃走成功者の予想は純が多いことになった。麻穂は零児か家康と予想し、健治は零児か純と予想した。

逃走成功の予想は以下の形になった。

鶴姫 徳川家康

健治 石田 純、有栖零児

稲姫 石田 純、徳川家康

孫尚香 村田木実、石田 純

太郎 石田 純、有栖零児

麻穂 徳川家康、有栖零児

圧倒的に多いのは純。次に多いのは家康と零児という結果になった。

やはり、逃走者の中でも最も身体能力が高い純、家康、零児の三名は逃走中の本命となる存在になるのだろうか？

ハンター「吉継」「さようか。純が逃走成功の鍵となるのか」

ハンター「三成」「家康も入っているのだな……」

ハンターである三成と吉継も確保者の予想を聞いて頷いていた。

ハンター「吉継」「徳川や純には悪いが、そろそろわれらも動かねばな」

ハンター「三成」「ああ、行くか、刑部」

凶王と沼地の蝶々の行動はここから始まった。

MISSION 2 - 3 & 通達 1 (後書き)

家康「いよいよ三成と刑部が動くのか……」

幸村「というか、何故それがしや政宗殿が入っておりませぬか!？」

慶次「ここからが正念場つてとこかねえ」

政宗「相手が誰だろうが、オレは絶対逃げ切つてやるぜ!」

通達2&MISSION3(前書き)

今回は短いです。

通達 2 & MISSION 3

逃走者達に一通のメールが送られてきた。このメールは、確保者による予想の結果だった。

零児「『逃走成功者の予想は第一位が石田 純』」

純(石田)「えっ!?!? 僕!?!?」

スタン「凄いじゃん、純君」

ルーティ「もしかしてあんたって逃走成功の本命じゃないの?」

純(石田)「いや、そんなことないですよ……僕が逃走成功の本命だなんて……」

零児「純を選んだ理由は『ハンターを振り切ってくれそうだから』、
『足が速いからハンターを撒いてくれそうだから』だそうだ」

純(石田)「でも、かすがさんが相手じゃ僕でも無理ですよ……」
ルーティ「大丈夫よ! あんたの足でハンターと距離を離せばいいじゃないの!」

すると、会話している彼らのもとにまた一通のメールが送られてきた。

零児「通達其の二『残り時間三十分になれば二人組のハンターを放出する』。二人組のハンター?」

スタン「二人組のハンターって誰なの?」

スネ夫「二人組のハンター?」

木実「ハンターって一人じゃなかったっけ? 二人組って……?」

他の逃走者は『二人組のハンター』という単語に引っ掛かってい

るが、家康だけは違った。

家康「二人組……三成と刑部か……」

元親「家康？ 二人組のはんたあつて誰だよ？」

家康「あいつらしかないよ。三成と刑部だ！」

木実「三成さんと大谷さん！？ 確か、あの人達は二人でやるってことは聞いてましたけど……」

元親「大谷は足が悪いが、石田に指示を出してやるとい判断力が凄く高いんだよな？」

そう、吉継は足は悪くとも、透視力が極めて高く、逃走者がどこにいるのか、どこに隠れているのかを三成に場所を伝えるため厄介な相手となるだろう。三成の俊足と吉継の透視力で追いかけられたら、逃走者は逃げ切れるかどうかは分からない。

スネ夫「じゃあ、吉継さんに気づかれなければいいじゃないかな？

三成さんは足は速いけど、吉継さんほど洞察力高くないでしょ？」

木実「あ、それは言えてるかも」

家康「だが、いずれ三成と刑部が放出される。ワシらがいつまでも隠れていられるのか時間の問題だ」

木実「そういえばメールでも『二人の連携には気をつける』と書かれてましたね」

尚、三成と吉継は常に二人で行動するため、彼らの連携に気を付けないければならない。彼らの放出来までは残り四分半となった。

また、引き続き逃走者に一通のメールが送られてきた。

木実「今度は何なの？」

雪菜「来た……ミッション3！」

今度のミッションは難易度が少し上がっているものだった。

彰久「『森林付近の場所に、指紋認証装置が設置された』」
政宗「『残り二十五分までに指紋を認証して、ハンターを消滅させなければならぬ』」

零児「『尚、残存している逃走者の人数分のハンターがこのハンターボックスの中に入っている』。俺達と同じ人数のハンターが放出されるのか……」

純（石田）「今、残ってるのは十六人だから……十六人のハンターが来るの!？」

ルーティ「じゅ……十六人のハンターが来たら絶対絶望的じゃないの!？」

スタン「でもさ、残り三十分になったら二人組のハンターも来るから余計まずいんじゃないか？」

現在のハンターは四体、残り時間三十分を切ったら三成と吉継が投入されて合計六体に、更には残存している逃走者分のハンターまでもが放出されたら逃走者にとって絶望的になる。

MISSION3 指紋を認証させてハンター放出を阻止せよ!

森林付近にて、指紋認証装置が設置された。

残り二十五分までに指紋認証装置で指紋を認証させてハンターを消滅させなければならない。

尚、現在残っている逃走者の人数分のハンターがハンターボックス

スの中に入っている。逃走者が自首したり、確保されたりしたらハンターは消滅する。」

彰久「出来るだけ一人でも多く消した方がいいよね！ 政宗さんもそう思いますよね！」

政宗「ああ！ 残り三十分になって二人も入ってくるから、余計増えたら厄介になるからな！」

ハンター消滅のため、逃走者は次々と立ち上がる。

雪菜「あたし達も動かなきゃダメだよ！ 人数分だから、一人でも多くハンターを消しに行かないと！」

のび太「そうですね！ ハンターも怖いけど……増やされたら一溜りもありませんから！」

ジャイアン「これは絶対行かねえとな！」

聖奈「このミッションは誰もが行くでしょうね」

これ以上ハンターを増やさせまいと、逃走者はミッションに挑む。ミッションに動けば、ハンターに見つかるリスクも高まる。

元親「森林付近か……ここからじゃ遠いな」

元親は地図を確認しながら呟く。

家康「急ごう！ 指紋を認証しに向かおう！」

木実「ハンターは……いないかな？」

スネ夫「ここは見つかりにくい場所だから、行けるんじゃないの？」

家康を先頭に、木実、元親、スネ夫の順に一列に並んで森林付近の指紋認識装置を探した。

勿論、ハンターに警戒しながら森林付近に設置されている装置を探すのだ。

彰久「あつ、あれじゃないですか？ 指紋認証装置って」

政宗「Hum……結構近かつたんだな」

指紋認証装置の一番近くにいたのは、彰久と政宗だった。しかし、背後からはハンター・かすがの姿があった。政宗は直ぐに反応して、急いで指紋を認証したあと、かすがから離れた。だが、彰久はまだ彼女に気づいておらず、指紋を認証しているところだった。

彰久「あれ？ 政宗……って、いつの間にハンター来てたのおおおおおお！？」

認証を終えて後ろを振り向くと、かすがが接近していることに気づいた彰久は絶叫を上げながら全力疾走で走り抜ける。

彰久「来るなああああああ！」

最初は遠くから追いかけられていたが、次第に距離が縮まり、彰久は確保されてしまった。

彰久「うああああ！」

土岐彰久確保、残り十五人

彰久は息を切らして、地面に転がった。

彰久「嘘おおお……マジでええ……？」

顔を覆いながら落胆する彰久だった。

彰久の確保情報はメールで逃走者に送られる。

木実「『土岐彰久確保、残り十五人』……！」

スネ夫「やっぱり確保のペース速いよ……」

家康「彰久まで捕まったか……このままじゃ全滅か？」

元親「残り三十二分で十五人ってやばくねえか！？」

次々と確保されていく逃走者に残りの逃走者は焦りを見せ始める。

現在、ハンターの数には政宗が指紋認証で、彰久が確保で一体ずつ消滅となり、十四体となった。

幸村「怖いでござるな……」

慶次「彰久捕まっちゃったよ……」

偶然にも、彰久の確保を目の当たりにした幸村と慶次。草の茂みに隠れて様子を見ていたようだ。さすがに彰久を確保したあと、過ぎ去っていく。

慶次「やっぱさすがちゃん速いなあ。遠くからでもすぐ捕まえるなんてさ」

幸村「女子とはいえ、油断できぬ相手でござるな……」

かすががいなくなったことを機会に幸村と慶次は草の茂みから出て、指紋認証装置を探し始めた。

ハンター放出まであと六分、また、二人組のハンターが放出するまであと一分

MISSION 3・2 (前書き)

連投ですww

MISSION 3 - 2

〔牢獄DEトーク〕

二人組のハンター放出まで残り一分を切った頃、三成と吉継は作者である葉月や同じハンターである佐助に伝えた。

ハンター「吉継」「葉月、猿飛、われらはもうすぐ出る」

葉月「うん、分かった。頑張ってるね」

ハンター「佐助」「今回は俺様の分身も出るけど、頑張るな」

ハンター「吉継」「任せよ。では三成、そろそろ参るか」

ハンター「三成」「ああ……」

三成と吉継の放出が近づこうとしたその時、先程かすがに確保された彰久が牢獄に向かって歩いていった。

太郎「あ、彰久お兄ちゃん」

彰久「あれ？ 二人組のハンターって三成さんと吉継さんだったの？」

彼らのやり取りを見た彰久は、二人組のハンターの正体が三成と吉継であることが判明して目が点になった。

ハンター「吉継」「まア、そういうわけよ。これからわれらは出るゆえな」

彰久「そうでしたか……頑張ってください」

彰久は追跡者である吉継に応援すると、そのまま牢獄の中に入っ

た。

鶴姫「逃走者にとって、ここからが正念場ってところですね」
麻穂「確か、本家でも中盤以降で次々と逃走者が確保されていったんだよね」

太郎「ゲーム終盤が一番山場じゃないの？」

健治「中盤からだろうが終盤からだろうが確保ラッシュするんだろ？」

確保者は中盤以降から確保ラッシュが始まると予想する。

本家の逃走中も中盤以降から確保ラッシュしているため、ここからが逃走者にとって山場となるだろう。

一番乗りには到着した政宗の次に、指紋認証装置に到着したのは、幸村と慶次だった。彼らの次に、純、零児、スタン、ルーティの四人。また四人に続いたのは雪菜、のび太、ジャイアン、聖奈の四人である。

続々と認証装置に集まる逃走者だが、未だに到着していないのは木実、家康、元親、スネ夫の四人のみだ。木実達は、森林付近まで他の逃走者と比べて距離が遠いため、到着するまで三分ほど時間が掛かる。

純（石田）「あれ？ 木実来てないの？」

幸村「ここに来るまで時間がかかるらしいでござる」

ジャイアン「まあ、噴水のところだからここまでは遠いだろっな」

慶次「ま、木実ちゃんのところには家康がいるから右目も孫市もかすがちゃんもやり過ぎせるんじゃないかな？」

雪菜「先輩も足が速い方だから遠くからハンター見かけたら撒いて

くれそうじゃん？」

のび太「木実さんはスネ夫を引つ張ってくれそうだしね！」

ジャイアン「そうだな！」

スタン「まあ皆、早いとこ指紋認証しよう。一人でも多くハンターを減らさないと！」

スタンの言うことは尤もだ。他の逃走者はスタンの言うとおり、指紋認証装置の前に立って一人ずつ指を出して装置に指紋を認証させる。

現在装置に集まっているのは十人の逃走者達。人数が多い分、ハンターを一人ずつ消滅させるまで時間が掛かる。

すると、ミッション中の逃走者のところに一通のメールが送られてきた。

聖奈「こんな時にメール？」
のび太「タイミング悪いよ……」

家康「残り三十分経過、二人組のハンター放出。ハンターの数は合計六体……ついに動き出したな、三成と刑部」

木実「ちよつと怖くなってきた……」

スネ夫「みんな隠れて！ハンターだよ！」

残り時間三十分が切り、三成と吉継が放出されたというメールが送られてくると、スネ夫はハンターの存在に気づいた。木実達はスネ夫に従って物陰に隠れた。

通りかかったのはハンター・孫市と小十郎である。水辺の辺りを探しているようだ。木実達は彼らに気づかれないことを祈った。ゴソゴソと音を立ててしまいが、どうやら見つからずに済んだ。

木実「スネ夫君！ 音を立てたらハンターにバレちゃうでしょ！」
スネ夫「ごめん……」

家康「危うく見つかるどころだったが、うまくやり過ごせたな」
元親「サヤカと右目も鋭い方だから音で気づかれると思ったんだが
なあ……」

家康「それがこれから動き出す三成と刑部だったら直ぐに追われて
いたよ……」

孫市と小十郎が過ぎ去ったあと、四人は物陰から現れ、指紋認証
装置を再び探し始める。果たして、四人は間に合うのか？

ハンター放出まで、あと五分

指紋認証装置に集まっている十人の逃走者はかわりばんこで指紋を認証しているところだ。一人ずつ指紋を認証をしているため、全員が認証するまでは時間が掛かる。

幸村「まだでござるかあ？ それがしもはやくやりたいでござるよ」
慶次「まあまあ待ちなよ！ 人数多いから順番が来るまで時間掛かるって！」

のび太「今すぐにハンターが来そうで怖いよ……」

ジャイアン「たしかにな。ここでハンターは最悪だな」

純（石田）「僕がハンターを見張るから、来たら直ぐに行動に移ってよ！」

ジャイアン「分かったぜ、純兄！」

最初に指紋を認証した純は、ハンターの様子を見ると言う。ハンターは神出鬼没、どこから来るのかは分からないもの。

慶次の次に幸村が指紋を認証する。幸村は右手の人差し指を出して指紋を認証させる。

あれから三十秒が過ぎたあと、十人目まで指紋を認証していると、純は叫ぶ。

純（石田）「ハンターだ！」

純が見たのはハンター・沙夜の姿。彼女は徐々に十人の逃走者達に近づいていく。沙夜は彼らを視界に捉え、走った。雪菜以外の逃走者は遠くから沙夜に気づき、遠くまで全力で走る。

雪菜も指紋認証を終えたときは既に彼女以外の逃走者は居なくなり、残っているのは彼女のみとなった。

雪菜「え？ みんなは？」

雪菜は他の逃走者を探すが、やはり誰もいなかった。彼女は逃げ遅れたのだ。

雪菜「やつ！ ハンター！？」

沙夜に気づいた雪菜だが、どう足掻いても沙夜に敵わず確保されてしまった。

雪菜「もう、やだぁ……みんなあたしを置いていくななんてひどいよぉ……」

雪菜は涙目になりながら地面に跪いた。

真田雪菜確保、残り十四人

雪菜の確保情報はメールで送られる。

純（石田）「『真田雪菜確保、残り十四人』！？ 雪菜ちゃん、逃げ遅れたの！？」

慶次「そりゃあ雪菜ちゃんは最後尾だったしねえ……認証中は逃げられないでしょ」

聖奈「雪菜さん、残念でしたね……」

沙夜を遠く見つけ、遠くまで逃げた逃走者は雪菜の確保で落胆する。

十人の中でも指紋認証の時は最後だった雪菜は、認証中に沙夜から逃げる事が出来なかった。

スタン「大勢で一緒にいると巻き添えを食らうから、分かれて正解だったね、ルーティ」

ルーティ「雪菜が確保されちゃったのは残念だったけど、まあ、あたし達は何とか残れてよかった」

スタン「ルーティ、隠れて！ハンターがいる！」

純達と分かれて二人で行動するスタンとルーティ。ここからは彼等は別行動していく。砂場の広場に歩いていくと、スタンはハンターを見つけてルーティに隠れると指示を出す。ルーティはスタンに言われたとおりに物陰に隠れて様子を見る。スタンもルーティと同じ場所に隠れてハンターの様子を見た。

彼らのところには三十分で放出された二人組のハンター・三成と吉継が通りかかる。

スタンとルーティはより姿勢を低くして三成と吉継が通り過ぎるのを待っていた。

スタン「早く行け！早く！」

スタンは彼らに聞こえないように出来るだけ小さな声で早く行けと呟いた。しかし、三成と吉継は通り過ぎるところか、スタンとルーティに近づいてきたのだ。

ルーティ「スタン、こっちに来たわよ！」

スタン「というか、何で俺達がここに居るって分かるの!？」
ルーティ「二人組のハンターの連携に気をつける」って……その
ことだったの!？」

スタンとルーティはメールの内容を思い出し、額から汗を流す。
二人組のハンターとは、今、スタンとルーティが出くわしている三
成と吉継だということに気づいた。

スタン「ルーティ、すぐに逃げよう! 隠れても無駄だ!」
ルーティ「ちよっ、何なのよ馬鹿スタン! 痛いでしょ!」

スタンはルーティの腕を引っ張って物陰から出て距離が遠いうち
に走っていく。

遠くから三成と吉継を見たスタンとルーティは全力で走り、また、
彼らもスタンとルーティを走りながら追いかけた。吉継が三成に場
所を伝えて三成が逃走者を追うという形だ。吉継は足が悪いため速
く走ることが出来ないが、浮遊は出来るため、逃走者を追うときは
宙を浮かせている。

ルーティ「というか何なのよあのハンター!？ しつこすぎるわよ
おおお!」

スタン「しかも凄いスピードで俺達を追ってくるうっうっ!？」
ルーティ「あんなしぶといハンターは見たことないわよおおお
おおお!」

スタンとルーティは絶叫しながら三成と吉継から距離を離そうと
全力疾走で走るも、その距離は徐々に縮まっっていく。

ルーティ「スタン! なんとかしなさいよおおお!」
スタン「そんなこと言ったってええええ! 相手は三成さんと吉継

さんだよおおおお!?　　というか、別れるって方法とかないのおお
おおお!？」

ルーティ「だんだん距離が縮まってきたわよおおお?！」

スタン「だーかーら別れた方がいいに決まってるだろおおお!?」

言い争いをしながら、スタンとルーティは二手に分かれることを
決めてスタンは真っ直ぐに、ルーティは左に向かった。後を追うよ
うに三成と吉継は左に向かってルーティを追いかける。

ルーティ「ちよつとおおおお!　　何であたしなのよおおお!」

ルーティはしつこく追いかけるハンターに涙目になりながら必死
に逃げる。だが、正面からは別のハンターが。

ルーティ「いやあああああ!」

別のハンター・孫市がルーティを追いかけて、挟み撃ちにする。ル
ーティは方向を変えようと曲がり角に曲がろうとするが、吉継がル
ーティの肩に手を乗せて確保した。

ルーティ「嘘でしょおおお……?　挟み撃ちってずるいわよお……
というか、ハンターってそこまでしつこく逃走者を追うものだった
のお……?」

地面に寝そべってルーティは両手で顔を覆い、息を切らしていた。

ルーティ・カトレット確保、残り十三人

ルーティの確保情報はメールで送られる。

スタン「『ルーティ・カトレット確保、残り十三人』……ルーティが捕まった……」

木実「うわぁ……ルーティさんが……」

スネ夫「ちよつと怖いよ……」

元親「サヤカもあいつを挟み撃ちにしたのか……」

物陰に隠れていた木実、家康、元親、スネ夫の四人はルーティの確保を目の当たりにする。

家康「やっぱり刑部に気を付けなければな……」

スネ夫「家康さん！ ミッションが終わるまであと二分三十秒ですよ！ 速く指紋認証に向かわないと！」

家康「しかし……先程三成達を通りかかったんだぞ？ もう少し様子を見てから向かうよ」

木実「ハンター放出したらどうするんです!？」

三成、吉継、孫市の三人が過ぎたときに木実、家康、元親、スネ夫の四人は彼らが居なくなつたことを機会に急いで森林付近の指紋認証装置に向かって走る。もう少しで着くはずだ。

ハンター放出まであと二分。果たして、間に合うのか!？

MISSION 3-4 (前書き)

今回短いです。

ハンター「孫市」「石田も大谷も加わったのか」

ハンター「吉継」「ヒヒツ、残り三十分でわれも三成も参加したところよ。まあ、先程入ったばかりだがな」

ハンター放出まであと二分を切った頃、ルーティを確保したハンター三人は歩きながら会話をしているところだった。

ハンター「孫市」「今思ったが大谷、お前、逃走者を追跡するとき石田みたいに走らないのだな」

ハンター「吉継」「われは足が悪くてな、歩くぐらいなら出来るが走るとなると、足が言うこと聞かないのよ」

ハンター「三成」「だから刑部は逃走者を追跡するときには宙を浮かせているのだ」

孫市は何故吉継が逃走者を追跡するときには三成のように走らないのかと聞くと、吉継は足が悪く、歩くくらいならば出来るが、速く走れないと答え、三成もそのためだと補足する。

ハンター「孫市」「なるほどな。逃走者を追跡するとき、石田の速さに合わせているということだな？」

孫市は説明を聞いたあと、納得の顔を浮かべて頷いた。

ハンター「吉継」「さて、雑賀よ。ここからはわれらとともに行くか？」

ハンター「孫市」「そうだな。共に行動するのも悪くはない」

ハンター「三成」「逃走者を見つけ次第、行動に移るぞ」

凶王と蝶々と鳥、合流して共に逃走者を搜索する。

*

スネ夫「あつ！ 見つけた！」

木実、家康、元親、スネ夫の四人はあれから一分探し続けて森の中に入ってから指紋認証装置を発見した。残り一分を切り、木実達は急いで指紋認証装置に向かい、到着すると最初に木実が指を出して指紋を認識をし始める。

スネ夫「あと三十秒……！ 木実姉、早く！」

ハンター放出まで刻一刻と迫っていき、四人の逃走者は焦りを見せる。木実が認識を終えると、次は家康が認識をする。その時はもう残りハンター放出まで二十秒となっていた。

家康「次、元親！」

元親「お、おう！」

家康が認識を終えて元親にボタンタッチし、元親は親指を出して指紋認識を始めた。もうその時はハンター放出まで残り十五秒。スネ夫に回らないかもしれない。

木実「ハンター放出まで残り十秒！ ……九、八、七、六……」
家康「やはり間に合わないか……？」

木実「五、四、三、二、一……」

木実は時間を見ながらカウントダウンをした。カウントダウンを終える前に元親はギリギリのところ認証を終えた。だが、元親の次はスネ夫の番だった。

元親が認識を終えたときはもう時間切れだった。スネ夫に回ることなく、三人しかハンターを消却させることが出来なかった。

よって、残りのハンターは佐助ただ一人。ちなみに本物の佐助は作者である葉月といるのでこの佐助は分身だ。

元親「すまねえスネ夫！ あんたに回せなかった！」

スネ夫「別にいいですよ。僕も諦めましたから」

元親は両手を合わせてスネ夫に謝った。彼に回せなかったことを許して欲しいと謝罪する。スネ夫はそれに対して許し、彼ももうこの時間だと間に合わないから諦めたと開き直る。

ミッションの結果はメールで送られる。

ジャイアン「なにになに？ ミッション失敗！？ 木実姉達、ハンターを消滅すること出来なかったのかよ!？」

慶次「『ハンターを一体放出する』……誰か出来なかったんだろうね」

幸村「まあ、一体はまだいい方だな」

純（石田）「ミッション失敗かあ……ハンター一体追加されちゃったな」

ミッション失敗によってハンター一体が放出され、ハンターの数は合計七体となった。ハンターが増えた分、逃走者の危機がより一層高まった。

ゲーム終了まで残り二十五分を切り、現在の逃走者は十三人。それに対してハンターは七体。

果たして逃走者は七体のハンターからどうやって逃げ切れるのだろうか？

MISSION 3-4 (後書き)

次回からは波乱の確保ラッシュが始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554w/>

逃走中 ~ 走れ! カオスの世界 ~

2011年11月20日21時44分発行